捨柱　軒の至て深くして、桁を用ゆるに端のおさまりのなき所にて立る柱也、杉丸太、栗のナグリ、

間柱　塗殘し窓の外ヅラへ添る竹也、窓の大小にかまはず、柱間の眞に打ゆへ間柱といふ、元來壁の助々なり、竹は白竹にて先四寸廻り、但し間柱ある時は、簾かけ釘寸法少し長し、

〔茶譜十四〕一利休流、二疊半ノ火爐裏脇ニ立ル柱ヲ中柱ト云、

右宗旦曰、中柱ト云能名ノ有ニ、當代之ヲ曲柱ト云、賤言葉ナリト云々、

右此柱不曲ハ如何可云、之モ大工ノ云初シヲ、今又不知之シテ人毎ニ云シ誤ナリ、

〔槐記〕享保十三年九月廿一日、夜參候、略○中世間一統ニ、圍居トサヘイヘバ、必ズユガミ柱ヲ立ルコト如何ナル譯ニヤ、定メテ田舍山居ノ、アルニマカセタル風流洒落ナラント存ズ、ソレ故拙科○山道安此度ノ圍居ニ、ユガミ柱ヲ忌ミテ直ナル柱ヲ建タリ、而シテ後ツク〳〵詠メテ初テ感ズ、昔人ノ仕置タルコトノ、後世用テ不止ハ、ヨク〳〵譯アリテノコト也、壁トマリノ木世間流ハ、大方一尺三寸バカリ、宗和ノ形カ、准后近衛家熙ノ御圍居ハ一尺九寸三分、ヨリ上、正直ニ細クシテ壁土ヲ見ルコト多ク、下ガ明タレバ、何トヤラン上ガアキタルヤウニテスマヌモノ也、ユガミガ入レバ、壁止リノ上ガ壁土格別ニ細ク、上ニテハ又ヒラキテ、色々ニ廣狹ガアル故ニ、正直ニモナシ、細長ニモ見エヌ故ニテハアルマジキヤト申シ上グ、如何樣ニモ左アルベシ、ソレモ直ナルヲ仕テ見テ覺ヘタル實見也ト仰○近衛家熙ラル、

〔茶道早合點上〕茶室

客の居疊を客疊といふ、道具をなをし置疊を道具疊と云、略○中大目疊と云は、長さ四尺七寸五歩なり、又大ともいふ、半ともいふ、

〔茶道筌蹄一〕小座鋪之部

疊　六尺三寸にかぎる、京間は厚サ一寸七分也、大坂は一寸八分、六尺五寸疊は二寸二分なり